デジタルアーカイブ・ビッグバン京都 98 セッションー『デジタルアーカイブ国際会議 98京都』

TEXT
伊豆田

1998年12月8日、「デジタルアーカイブ国際会議 98京都」と銘打たれたこのイベントは、デジタルアーカイブの具体的な活用促進を目的に行われたものです。

有形無形の文化資産が集積し、世界的にも「千年の古都」として名高い京都ならではのデジタルアーカイブ事業への提言が多数ありました。

最初に行われたのは裏千家家元である千宗室氏の招待講演「茶の心平和のこころ」です。

氏は特に文化財関係のデジタルアーカイブに対して、データ収集のみに力を注ぐのではなくそれを受け継いでいく人（人材）の大切さや、現在の文化財の保存状況の貧弱さを挙げて、形（データ）の保存ばかりが先行するアーカイブ化の現状に苦言を呈しておられました。

次に行われたのは3件の「デジタルアーカイブ先導事例プレゼンテーション」です。

一つ目は龍谷大学の岡田至弘教授による「本願寺書院のデジタルアーカイブ化プロジェクト」の中間レポートでした。

絢爛豪華な襖絵を始めとする本願寺書院の美術品を単にデジカメで録画するのではなく、建立された当時の美術様式まで考えて立体的にアーカイブするための苦労話や、多バンド撮影したデジタルデータを加工して、風雪によって失われた美術品の色彩を復元するといったデジタル技術ならではの可能性を感じさせる内容でした。

次の発表は京都造形芸術大学メディア美学研究センター所長の武邑光裕（たけむらみつひろ）氏による「最後の浮世絵師「豊原国周」の華麗なる世界」という作品の紹介と、これからの美術品のデジタルアーカイブについて、どうすればデジタルの情報（映像等）を使って実在の美術館のような鑑賞体験をさせることが出来るか等のお話でした。

お二人の話を聞いて思ったことは、技術は今後いくらでも向上するであろうし、むしろ技術の使い方（昔の色の復元なんて個人的には奈良の仏像にやってみて欲しいですね）と、データの提示の方法（ユーザーインターフェース）を意識して洗練させないといけないなということです。

いくら綺麗な映像が見れると言ったってそれだけじゃあすぐに飽きてしまうでしょうから、それでは開かれない美術教科書と同じことになってしまいます。

その点デジタルアーカイブにはデジタルでしか表現できない要素がまだ眠っているように思います。

そこで一つの考え方としてテレビゲームのユーザーインターフェースの研究なんていいんじゃないかと、手前みそながら考えてしまいました。

三人目はUNESCO「文化のための新技術局」の職員、松本慎二氏が世界遺産にデジタルアーカイブの発想を活かせないだろうかということで、例として世界遺産に指定された建築物を24時間写すカメラを設置してその映像をリアルタイムでWeb上に配信するという案を話されました。

これは貴重な現物の補完機能という、デジタルアーカイブの目指す利用法についての一つの重要な示唆だと思います。さて最後はノンフィクション作家の山根一眞氏をコーディネーターに、国内外から集まったデジタルアーカイブについて一家言ある方・現在デジタルアーカイブを商業利用されている方をパネリストに迎えてのシンポジウム「デジタルアーカイブの利活用と知的財産権の円滑的処理策への提言」が行われました。

話題の中心となったのは、やはり法律絡み話とデジタルアーカイブ自体にかかるコストの問題です。

例えばデータを保存しておくメディア自体の陳腐化への対応や著作権利用の許諾をもらいに行くコーディネイト作業といった地味な仕事の重要性について話されたのは、フランス国立美術館連合（RMN）フォトエージェンシー部長であるミシェール・リシャール氏で、実際にデジタルアーカイブを商業ベースで活用していくための大変さをこのほかにも色々と語って下さいました。

現在氏の勤めるフォトエージェンシーも経済的には苦しい状況だそうです。

日本のデジタルアーカイブの現状については、椙山敬士（弁護士／デジタルアーカイブ推進協議会利権問題研究会代表）氏が法制度の遅れを嘆いておられたり、中川久定（京都国立博物館館長）氏が2001年から独立行政法人として経営が自分たちの仕事になることを挙げて、現状のままでは残すものとそうでないものとを考えないといけないかも知れないといったシビアな意見が相次ぎました。

（現在、日本の博物館における入場料収入は全体予算の10％にしかなっていないそうですから、現状のままで行けば中川氏の危惧されている議論が真実味を帯びることになるでしょう。）

総論としては、デジタル化が求められていることは間違い無いが、その利用に際し、法整備や実際上の課金制度などクリアすべき問題が山積している。これからも皆さん協力しあって頑張りましょう、といったところでしょうか。

みなさんはデジタルアーカイブについてどのようにお考えでしょうか。

その未来を決めるのは実はユーザーである我々一人ひとりです。

先人達の作り上げた素晴らしい文化を受け継ぎ利用するための新しい可能性、デジタルアーカイブの未来を私たちも考えてみませんか。

伊豆田　幸司（ps002979@sps.ritsumei.ac.jp）/立命館大学政策科学部

デジタルアーカイブ・ビッグバン京都98 セッションⅡ『KYOTO BORN AGAIN』

1998年12月8日から10日まで開かれたデジタルアーカイブ・ビッグバン京都98の初日に行われたセッションⅡの「デジタルアーカイブ産業化フォーラム　KYOTO BORN AGAIN」に参加してきました。

今井賢一スタンフォード大学教授（京都府中小企業総合センター所長）と松岡正剛編集工学研究所所長（東京大学客員教授）の二人を中心として多数の著名人がぞくぞく登場し、対談・鼎談の形式で行われました。

京都の文化・産業の振興やその展望、それらのデジタルアーカイブ化という新しい息吹について、多くのお話を拝聴することができました。

一部は、「花鳥風月デジタルアーカイブ」。今回、松岡氏の編集工学研究所が、京都府と一緒になって制作した「景色景物景気集　THEMIYAKO」の紹介を軸にしてデジタルアーカイブについてお話をされました。冒頭では、デジタルアーカイブを、「記憶の劇場」「連想の劇場」と表現されていました。

この「THEMIYAKO」は、京都が擁する様々なコンテンツ、例えば神社仏閣、川や町、道などをデジタル化したマルチメディアデータベースなのだそうです。

紹介のデモビデオでは、画像と画像がリンクしている、という印象が強く、また、京ことばの語り部をつけたり、効果音をつけたり、と「華やかな」アーカイブでした。

連鎖・連想という考え方が多く反映されており、細部まで連鎖していることに驚きを覚えました。連想という考え方で面白かったのは「花鳥風月型連想」というものでしょうか。

ひとつのオブジェクトから5つのタイプの連想リンクがあり、同類のもの／親類／原型など、連想のアプローチ方法を分類しているのです。

連想はデジタルアーカイブを面白くするメタファーの一つ。関係性に着目した分類という発想はGAPにも必要になるかもしれません。

この「THEMIYAKO」は「インテリジェント・パッド」という技術を活用しているそうです。インテリジェント・パッドとは、ポストイットのようにコンテンツを重ねたり付け加えたりが自由にできる「かしこい紙」で、今井氏はこの技術を使えば様々な人の手によって情報が付け加えられ、アーカイブ事体が変化・進化していける、そのことが今後のアーカイブにとって必要な機能だと強調しておられました。

「成長する、アーカイブ」。情報を付加する機能が実現できれば、面白い試みですね。

第二部の「敬承と再生の技術」では能楽師の金剛永謹氏、衣装デザイナーのワダエミ氏、陶芸家の楽吉左衛門氏の三人がパネリストとして登場されました。

金剛氏は、能の継承というものについてお話され、室町時代の能の面なども拝見しました。衣装デザイナーのワダエミさんは、黒澤明監督の映画で数多くの衣装を手掛けた方。

スライドでは「乱」「利休」などの映画で使用された鮮やかな衣装が紹介されていました。

衣装デザインのアイデアをどのように得るのか、や歴史上の人物の衣装を手掛けるときの難しさなどを語っておられました。

陶芸家の楽氏は、初代の作品から自分の作品までを時系列で紹介していかれました。脈々と伝わるものと変化していくもの。同じ伝統を引き継ぎながらも、代ごとに顔が違うものなのだなと感じました。

伝統の継承には型を「写す」行為が附随します。この「写す」という行為はなんらかの型を模倣するもので、創造を捨てることではあるが、そこには必ず創造するという行為が存在する、そして京都の芸術／文化は古いものを「写す」と言う行為によって継承され、同時に再生されて現在まで生きて存在している。これから京都の文化を継承していくためには、再生（=BORN AGAIN）が大切なのだということでした。

第三部では、「KYOTO BORN AGEIN」と題し、京都で取り組まれているアーカイブの例として「京都醍醐寺の文書アーカイブ」や「陶磁器Virtual美術館」「ハイパーシルク」などが紹介されました。

また、パネリストとして、文様のアーカイブをされている京都造形大学の武邑先生が色の組み合わせのお話をされていました。

色の組み合わせ、というのには古代からのコンテクストがあって、その情報はなんらかの有益性をもつのでは、ということでした。色自体をコンテンツとするだけではなくて組み合わせの意味というものをコンテンツとしてあつかう、という発想が新鮮です。

また、黒竹さんという建築家の方もパネリストとして登場されていました。黒竹氏は、京都中京区に残る町家の整備・再生を行われています。

木造建築というのは修繕がしやすいものらしく、古い町家を修繕し、呉服屋さんとして使用できるようにしたりしておられるそうです。

古いものを古いものとして残していくだけではなくて、それを使用することによってでてくる価値があるということでした。

盛んに話されていたのは、アーカイブは「生きた情報」を扱うものでなくてはならないということ。

伝統文化をデジタルアーカイブするとき、伝統の核となる情報が抜け落ちてしまう可能性がある。形だけをアーカイブしてもそれは形骸化された伝統にすぎない、アーカイブを生きたものにするにはその伝統文化のエッセンスをアーカイブ化する必要があるのだ、というお話でした。

確かにデジタルアーカイブをする上では情報のぬけ落ちをどうカバーし、生きた情報を載せるか、は普遍的な課題のひとつなのだろうと感じました。これはGAPにとってもテーマの一つになるのではないでしょうか。

最後には多くのパネリストの方から、「人のネットワーク」というコンテンツが欲しい、という意見がでたのが印象的でした。

京都は本当に伝統文化の宝庫だなと実感した今回のセッション。膨大な文化資産を抱え、これを如何に発信していくかが今後の鍵を握るのだろうと思います。

TEXT たぐち

田口　寿子（ba044974@askic.kic.ritsumei.ac.jp）/立命館大学経営学部

デジタルアーカイブ・ビッグバン京都98 セッションV『京都のデジタル新世紀』

TEXT 福井

1998年12月10日は、京都市にある国立京都国際会館において3日間に渡って行われた、デジタルアーカイブ・ビッグバン京都98の最終日でした。

最終日は、『京都のデジタル新世紀～デジタルアーカイブは京都に何をもたらすのか～』という題材で、開催地京都になぞらえながら、デジタルアーカイブの本質的な問題点について論議されたのを聞いて参りました。

最終日は、基調講演・プレゼンテーション・シンポジウムの三本立てでした。

基調講演のデリック・デ・ケリコフ氏のお話では、ヴァーチャルリアリティとリアリティを融合させた都市アーカイブの実例に関するお話が印象的でした。

ベルリンの都市全体をアーカイブ化（デジタル化）し、そのヴァーチャルリアリティの世界と実際の生活空間を融合させる試みです。

これにより、リアリティを超える補完的な現実を作り上げる事ができるというものでした。

また"Why digitize Kyoto?"という命題から、京都という都市をデジタル化した場合の長所・短所を述べられました。

京都も含め未来都市にはQuality of Lifeを実現できるスマートコミュニティである必要があるというご意見でした。

次に元コルビス社長のダグ・ロワン氏のお話では、デジタルアーカイブの構築要件の提示と具体的な作成・配信に関する知見が述べられました。

デジタルアーカイブの構築要件においては、私達GAPが考えていた様な内容が網羅されており、なるほどと、うなずかされる事の多い内容でした。

また、具体的なアーカイブの作成に関するお話では、ダグ・ロワン氏自らが市販のアプリケーションを用いて短時間で作成したという作品を参照しながらのお話となりました。

ヴァーチャルリアリティ世界を作る上で、市販のアプリケーションがどこまで技術を持っているか、この技術をいかに役立てるかという実例を紹介されました。

アーカイブという観念を持って作られた訳ではないけれども、技術の発展の早いソフトに発想力を加えれば、誰でもアーカイブを作り始める事ができるというメッセージであったと理解しています。

最後は2時間半に渡るシンポジウムで、題材は「デジタルアーカイブは京都に何をもたらすのか」というものでした。

パネリストは主に京都の文化をよく知る地元の有識者を中心としており、具体的な内容としては以下の3点に集約される様な内容の事を議論されていました。

- ・文化（形のないモノ）を伝える手段としてのデジタルアーカイブについて
- ・デジタルアーカイブをどの様にして活かすかという事について
- ・デジタルアーカイブとリアルな世界の共存について

どれもが答えの出ない論点でありましたが、議論は白熱していました。

この3点に共通する議論としてある、モノの奥にある情報の価値の伝達手段という命題には興味をそそられました。

技術的・制度的な手段において解決できる部分も多少あるでしょうが、そのコンテンツをいかにアーカイブ化するかという事に大きく左右されるのではないかと感じました。

3日間行われたこのデジタルアーカイブ・ビッグバン京都98の閉会式において、実行委員長の稲盛和夫氏が読み上げられた「デジタルアーカイブ京都宣言」では、「新しい記憶の大地」「新しい文化と知の大地」という言葉でデジタルアーカイブの可能性をなぞらえられていました。

しかしながら振り返って考えてみると、発表や同時に行われた展示の中に見た技術の素晴らしい飛躍に対して、アーカイブ自体に関しては一線を画した作品が出てきていなかった様な印象を受けました。

京都という都市は、文化の積み重ねからしてコンテンツの宝庫と自他共に認められているにも関わらず、使い方という価値を忘れてしまっているのかも知れません。

使い方という価値を創発させうるツールとなり得るかどうかが、デジタルアーカイブが発展するか否かの分かれ道になるのではないかと思いました。

最後に、今回のデジタルアーカイブ・ビッグバン京都98を見に行った感想のまとめとしては、コンテンツ自体についても、著作権などの問題についても、理想と現実の狭間でどの様に揺れ動いているかという、現状認識の視点に立ったものが多かったのが少し残念でした。

それだけでなく、理想自体がどの様なモノであるか、現実的にはどこまでできるのかという視点での議論がもう少し多ければ、アーカイブの可能性を引き出すような議論が出来たのではないかと思いました。

どこに問題点があるかは、様々な方が代わる代わる繰り返し述べられたので再認識させられましたが、結局その問題は解決できるのかどうか、その足かせがなくなった時の未来像のイメージについてはあまり話されなかった様に感じます。

また、「歴史と文化の京都」について語られた側面が大きく、私達GAPの活動に直接的にプラスになる面白いお話がほとんどなかったのは残念な限りでした。

福井 伸一（ps025960@sps.ritsumei.ac.jp）/立命館大学政策科学部